

第5回災害文化研究会が目指すもの

災害文化研究会
山崎 友子

盛岡にいいよ冬到来という11月の週末に開催した第五回災害文化研究会のテーマは「生きる現場から本格復興を創る」です。9月には、20億円を超える経費をかけた「東日本大震災津波伝承館」が陸前高田に完成し、様々な復興事業は震災から10年目を一つの区切りとして完了しようとしています。

しかし、2017年、2019年と台風・大雨により、東日本大震災の被災地は再び大きな被害を受けました。また、かけがえのない命や大切なものを失った嘆きは、癒されるどころか、近年さらに深まっているという調査結果もあります。被災地の外では、もう9年、復興している（はず）、という捉え方が一般的となっているとき、「本格復興」とは何かを問い、そこへ至る道を探らなければならないと考えます。

災害は「過酷な死」と「過酷な生」を被災者につきつけます。両者は一体となって生きる者に迫ります。「死」は語る事が困難なのですが、「日本社会に通念として行われている‘7回忌’を終え、ある意味心の整理ができました」という会員の声に背中を押され、災害史のパイオニアである北原糸子先生に死者の問題を、歴史という長い時間軸で捉えての講演をお願いしました。2011年3月、あまりに多くの死者を前に通常の埋葬すら困難な状況を被災地で目にされた北原先生は、沿岸での調査をさらに行われ、「自然災害と大量死～死者はどう葬られてきたか」という題目での基調講演を準備してくださいました。

シンポジウムでは、東日本大震災後、「過酷な生」に対してどう向き合ってきたか、命の電話を通したつながり、文学によるつながり、生産の場でのつながりから、3人のシンポジストにそれぞれの活動の報告をお願いし、指定討論者から問題提起をすることで、「過酷な死」と「過酷な生」という問題の接合点を見出し、「生きる現場から

本格復興を考える」手掛かりを求めます。

全体会に先立つスタディツアーは、三陸沿岸の町釜石・大槌の寺院・追悼碑・郷土資料館を訪れ、津波災害と艦砲射撃という災害と闘ってきた歴史と今を見学する旅です。災害文化研究会顧問の斎藤徳美先生に解説をしていただきながら、家族を亡くされた方の震災甚句、直後の救命活動にあられた消防士さん、まちの未来と命を祈る方々から直接お話しを伺いました。まさに「過酷な生を生きる現場」であり、被災地外での想像を超える衝撃的なものでした。黄金のご位牌が町の配列に従って配置された吉祥寺のお堂に入ると、圧倒されます。亡くなられた方への手厚い供養の中に「生」への温かい思いが溢れています。鶴住居の慰霊碑は鉄の街釜石の鉄で作られています。被災地では「生」が「過酷な死」への思いとともに歩んでいました。

寺田寅彦は「災難は生命の醸母である」と言い、逆境から新しいものが生み出される可能性を考えました。災害は弱いものにより大きな打撃を与えます。とすると、弱いところこそ、変革・革新の可能性を持ちます。逆境に光をあて、その中での変革・創造に気づき、よりよい未来＝本格復興を創るスプリングボードでありたいとの思いが広がることを願って、第五回研究会を開催しました。

本研究会は、災害文化研究会・岩手大学地域防災研究センター・福島大学うつくしまふくしま未来支援センターの主催で、一部JSPS科学研究費の助成による研究「“災害文化”の概念の深化と確立～減災の扉の鍵を提供するものとして」と「災害被災地域における産業復興に関する地理学的研究」の支援を受けて開催しました。また、INSふるさと創生研究会・岩手県国際交流協会・岩手日報社・NHK盛岡放送局・三陸鉄道株式会社の後援を得ました。多くの方々のご尽力・ご協力に感謝申し上げます。